

「令和6年度 日南市立飫肥中学校 校内研究のまとめ」

I 研究主題

スクールワイドP B Sを活用した学習支援と生徒指導の探究 ～スクールワイドP B Sの効果的な導入のあり方～

2 主題設定の理由

特別な教育的支援を必要とする生徒の割合が増加していることから、学習支援・生徒指導を柱に組織的に学校運営を行うため、本校では今年度から3か年の計画でスクールワイドP B S（以下「SWPBS」と言う）を実践することにした。

そして、今年度は、SWPBSの探索段階及び導入段階（データに基づく取り組み）の1年と位置づけ、3年間のサイクルで本研究を行う。

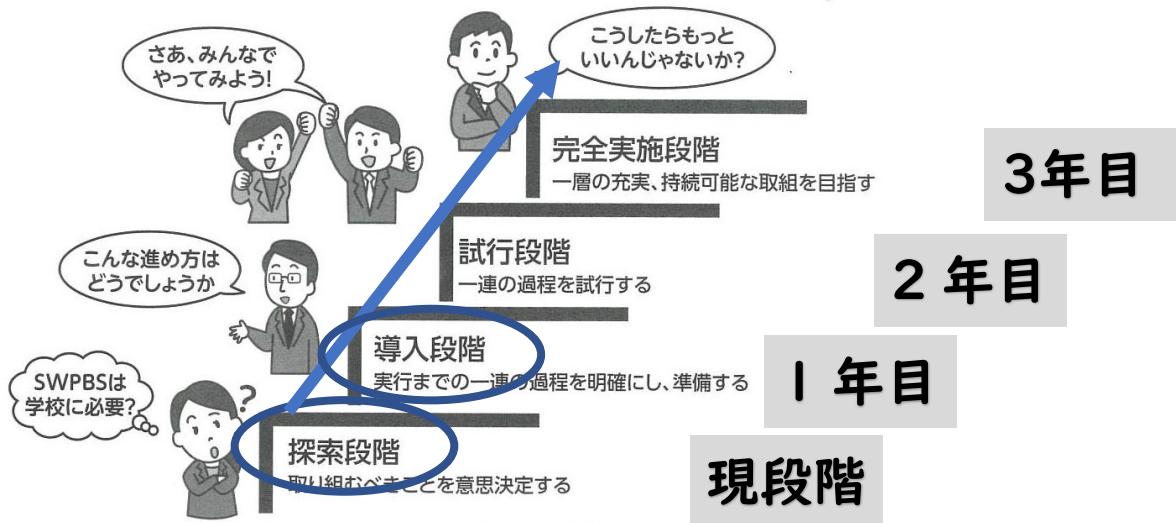


図 1-3-1 SWPBS 実行の4段階

「学校全体で取り組むポジティブ行動支援スタートガイド」ジーアース教育新社より引用

3 研究の目標（ゴールイメージ）

- 今年度は、教職員のSWPBSに関する知識理解を深める。
- 実態把握（個別・集団）と組織づくりのために、全国学習状況調査の生徒質問を分析し、スクリーニングシートを作成する。それを基に具体的に変容の視点を考える。
- 生徒会、話し合い専門委員会等と連携をとり、行動目標の作成を行う。
- 今年度中にプレ実施（2項目全体の場、個別の場）を行い、改善点や変更点などを洗い出し、次年度の試行実施に備える。

4 全体構想図

本校の教育目標	心豊かで志を高くもち、たくましく生きる生徒の育成
学校経営方針	「自立」「共生」「感謝」をキーワードに、全職員が常に“生徒にとっては”ということを議論、判断の中心としながら「授業の充実」「生徒指導の充実」「家庭や地域との協働」に一体となって取り組み、多様性を認め合い感謝の心をもち主体的に学ぶ生徒が育つ学校づくりを目指す。
本校の目指す生徒像	心豊かな生徒 自立する生徒 チャレンジする生徒
本年度の重点目標	生徒が自らできる環境をつくり、認めて伸ばす教育を推進することで、「他者から学ぶ力」「自ら学ぶ力」「自然から学ぶ力」「社会から学ぶ力」を身に付けさせる。
研究主題	スクールワイドP B Sを活用した学習支援と生徒指導の探究 ～スクールワイドP B Sの効果的な導入のあり方～
研究仮説	全職員がS W P B Sを理解し、チームとして教職員や関係者が校内支援体制をつくりあげるとともに、S W P B Sを効果的に活用した指導を行えば、生徒自身が自発的・主体的に成長・発達していく過程を支える発達支持的生徒指導の実現につながるであろう。また、それが生徒たちの「わかった」「できた」を育て学力の向上につながるであろう。 職員全体での取組を目指すため、統一した指導ができ、指導のばらつきもなくなり一体感が増し、より指導の質が高まるであろう。
研究班構成	*チームP B S 研究主任、生徒指導主事、教務主任、特別支援Co、生徒会担当 学習委員会担当、文化委員会担当、生活委員会担当、保育委員会担当

5 研究の計画

月日	研修内容	
	職員	生徒
4月	研修内容及び研修計画の提案	
5月	教職員の知識と意識の向上①（一般的な内容）	
6月	教職員の知識と意識の向上②（飫肥中向け）	
7月	・実態把握の検討と組織づくり（チーム編成） ・昨年度の全国学習状況調査（生徒質問）の分析（本校の強み・弱み）	

	<ul style="list-style-type: none"> ・全国学習状況調査では、調査では分からぬ 強み・弱みを考える。 	
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の分析結果と今年度の全国学習状況調査 (生徒質問) 分析 ・「学校で期待される姿」を考える 	
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・推進チームの定期的な会議 ・スクリーニングの記録を開始 ・行動目標原案を作成(11月までに完成を目指す) 	
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・主題研後、第1回 PBS プロジェクトチーム発足(通称: チーム PBS) 	<ul style="list-style-type: none"> ・新生徒会発足
11月 13日 主題研	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム PBS の定期的会議 31週: チーム PBS メンバーによる行動目標たたき台の作成 32週: たたき台の回収(研究推進委員会で検討) 行動目標の職員案完成 32~36週: 生徒会検討状況の共有 推進委員会 + 生徒会担当 	<ul style="list-style-type: none"> ・PBSについて説明(研究主任) 「自分たちで学校を良くする」と いうことを考えさせる 毎週(水)昼休み定例会実施(生徒会担当) ・行動目標の作成 32週: 1回目行動目標の検討 33週: 2回目行動目標の検討 34週: 3回目行動目標の検討 35週: 修学旅行のため×
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム PBS の定期的会議 37週: 担当職員確認 38週: 推進委員会での確認、微調整、主題研に向けての確認 	<ul style="list-style-type: none"> 36週: 4回目行動目標の生徒会案の完成 37週: 専門委員長、副委員長との確認 38週: 生徒会案の微調整
24日 主題研	放課後: 職員案と生徒案を突き合わせ <ul style="list-style-type: none"> ・飫肥中行動目標の完成 	放課後: 職員案と生徒案を突き合わせ
1月 21日 主題研	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム PBS の定期的会議 ・3年生のプチ SWPBS の成果共有 ・スクリーニングシート(案)提示 ・チケット方式/キャンペーン方式の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・飫肥中行動目標の完成
2月 19日 主題研	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム PBS の定期的会議 ・スクリーニングシートの完成 ・データの収集、共有 ・主題研のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ・飫肥中行動目標の完成周知 ・スクリーニング実施 ・プレ取組2/17~2/28
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム PBS の定期的会議 ・次年度準備 	

次年度の研究計画（案）

月日	研修内容	
	職員	生徒
4月	研修内容及び研修計画の提案	
5月	教職員の共有①（キャンペーン方式）	生徒総会で発表 発表後実施へ
6月	教職員の共有②（委員会との連携） スクリーニング調査	
7月		
8月	SWPBS 他校状況（研修）	
9月	ABC 分析を活かした授業改善	
10月	ABC 分析を活かした授業改善	相互参観授業
11月	ABC 分析を活かした授業改善	生徒総会（自指す生徒像とは？パネルディスカッション）
12月	ABC 分析を活かした授業改善 次年度検討事項	
1月		
2月	スクリーニング調査	
3月	次年度準備	

4 研究の実際

【第1回～3回 校長による職員に向けた指導】

最初は、SWPBSの一般的な内容を理解し、本校で、なぜSWPBSが有効と考える理由について講義を受けた。最初は、「言葉を聞いたことがある。」「実際の所どうなのか」「手間が増えるのでは」など消極的な意見もあつたが、講義を受ける中で、少しずつ知識から理解へ変化していく様子があった。特に、応用行動分析のABC分析について丁寧に説明がなされた。



【第4回 全国学習状況調査（生徒質問）の分析（本校の強み・弱み）】

全国学習状況調査の生徒質問を分担して読み取りを行った。全国との差の洗い出し、「肯定解答が 60%未満 or 60%以上」「全国平均上回る項目 5 or 10 ポイント」またその逆をピックアップして議論を深め、さらに全国学習状況調査からは見られない項目、知りたい項目について議論した。



この分析が、SWPBSで「目指す生徒像」を明確にし「行動目標」の設定に繋げるために行っているということが伝わりにくいところがあった。

【第5回 昨年度と今年度の全国学習状況調査（生徒質問）分析と学校で期待される姿を考える】

全国学習状況調査から強み、弱みを見極め、本校の「目指す生徒像」が「自己実現に努力できる生徒」「自他を尊重する生徒」「創造力のある生徒」に決まった。続いて「行動目標」の設定に移ったが、行動マトリクスの横軸を委員会の活動をベースにするのか、学校で場面にするのかについての議論に時間がかかった。最終的には、生徒自身が行動目標を考えやすいという理由から、行動マトリクスの横軸は学校の場面とすることとした。

飫肥中学校 目指す生徒の姿

【 自己実現に努力できる生徒　　自他を尊重する生徒　　創造力のある生徒 】

【第6回推進チームの定期的な会議の発足と行動目標原案を作成】

本校の行動目標のたたき台を推進チーム（チームPBS）で何度も検討し、素案を作り上げた。本校のキーワード「自立・共生・感謝」を縦軸に据えて検討したが、実際には「共生」「感謝」の項目において肯定的かつ具体的に表現させたい行動を考えることに苦慮した。

【第7回 行動目標の作成について①】

職員案を作成した。全員が具体的に取り組めるもの、評価ができるように見てわかる行動目標にする、しかし、気持ちのない行動はおかしい！わざわざできることを設定しない、など活発な意見交換が進んだ。

【第8回 行動目標の作成について②】

2か月に渡り、生徒会執行部+専門委員長を中心となり行動目標の設定に取り組んだ。そして、その生徒案と職員案のすり合わせを行った。何よりも生徒がイメージしやすい、わかりやすい（言葉、表現）ということがポイントであるように感じた。

一緒に話し合うことで、生徒会メンバー達の努力してきたことが、認められる場面となり、生徒の達成感にもつながるよい機会となった。



「飫肥中学校 行動目標」

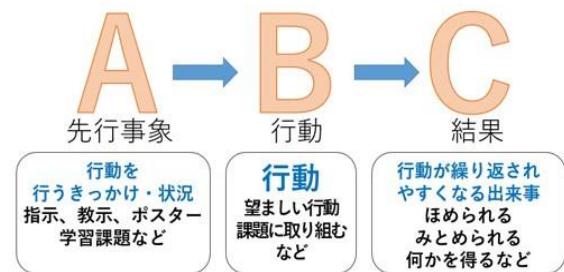
自立				共生				感謝			
休み時間 (業間朝の 会前含む)	1分前に着席しよう			みんなに気を配り ながら過ごそう				挨拶をして教室にはいろう (朝の 会前) 教材の準備をしよう (業間)			
授業中	メリハリをつけよう			相手の話を傾きな がら聴こう				あいさつの時は、立腰しよう			
トイレ	自分が使ったトイレ のスリッパを並べよ う			用が済んだらすぐ にでよう				トイレを大切に使おう			

廊下	静かに歩こう	譲り合って移動しよう	100回会ったら100回挨拶しよう
清掃	時間いっぱい清掃しよう	分担して清掃に取り組もう	清掃用具を丁寧に使おう

【第9回 行動目標完成・プレ実施】

3年生で2学期に実施したプチ実践の報告では、最初は二の足を踏む状況であったが、「実践してみると良かった」「小さいことから進めてみる」「まず一回やってみるが大切だと感じた」「生徒自身がやっている感を持たせることが重要である」といった報告がなされた。

そして、プレ実施に向けて、ABCのC（フィードバックの工夫）について多くの意見があった。全体を認める場面、個々に認める場面そのフィードバックの仕方が難しいと議論なった。A「先行事象」では、職員間の指導の共通理解と「なぜ、この行動が大切なのか」そのことをしっかりと確認する必要性がある。最も大切な部分がこの「先行事象」であるという確認を行った。



【プレ実施】

本校で、既に取り組んでいるノーチャイム週間を使い、行動目標の1つである「1分前着席」についてキャンペーン形式で実践した。当初の見立てでは、殆どの生徒ができると考え、一人一人を認め褒めるフィードバックが難しいのではという意見が多くあった。そこで、フィードバックの場面では、ICT支援員と協力し、多くの生徒を短時間で個々に認められるフィードバックの方法「OBI AQUARIUM」を考案した。



具体的には、できた生徒が生徒用端末で教員が示すQRコードを読み込むと自動的にポイントが貯まるシステムを構築した。ポイントが貯まると水槽の中のアイテムが与えられる方法をとることにより生徒にワクワク感を与え、行動が繰り返されるきっかけになればと思い、推進チームなど枠を飛び越えた先生方のアイデアと積極的な協力により実現した。

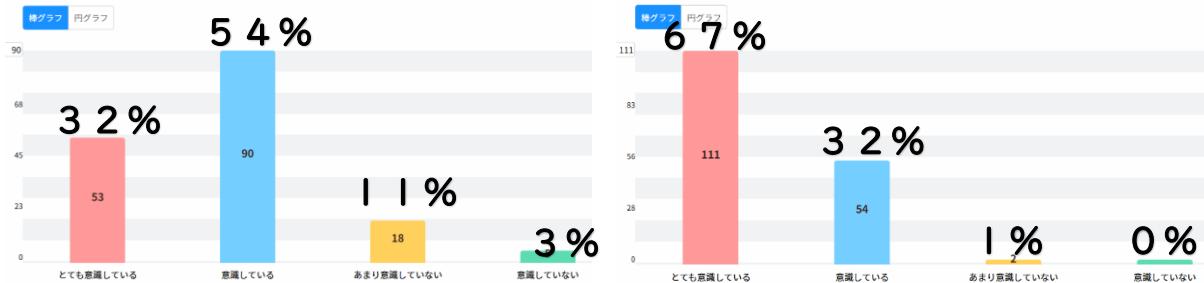
【プレ実施の成果と課題】

(実施前)



(実施後)

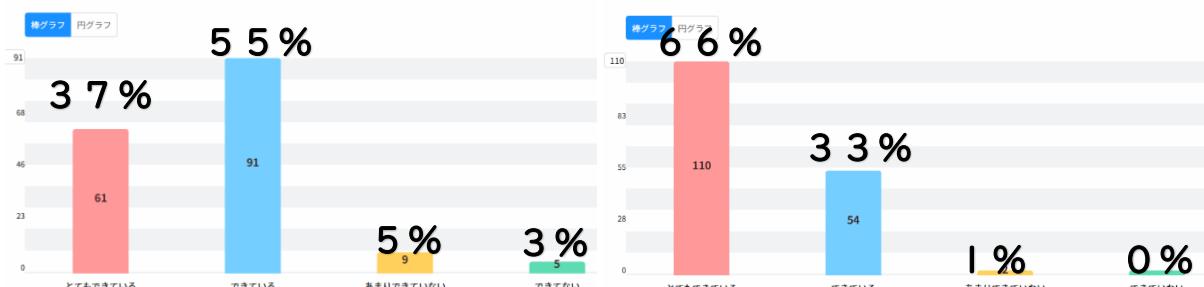
Q1 1分前着席を意識している。



(実施前)



Q2 1分前着席ができている。

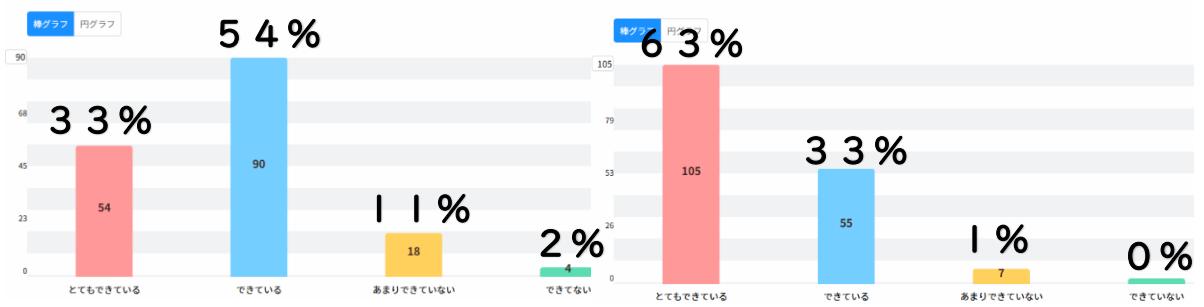


(実施前)



(実施後)

Q3 時計を見て行動できている。



事前アンケートの結果より、実践後はどの項目も「とてもできている」と「できている」の割合が逆転しており、効果が認められた。

生徒たちからは「意識できるようになった」「OBIAQUARIUM が貯まるのが楽しみだった」などの感想を聞くことができた。

実践の中で、共通理解の大しさ、QR コードの提示の仕方、教員側からの声掛けの徹底など、実践を通して明らかになった課題が多くあった。

5 研究のまとめ

(成果)

○導入段階について

最初は、導入に抵抗感があった職員もいたかと思う。しかし、主題研究として取り組む中で、全職員で意見交換や質疑応答を行う機会を多くしてきた。その結果、全職員の賛同を獲得できたとまではいわないが、職員間でSWPBSが浸透してきたと思う。「できる環境を作って成功させて褒める」を意識して指導に向かう、行動のABCに意識的に取り組む、そういったことが職員の会話の中にも現れ始めた。職員の理解と意識の向上の部分では土台作りは成功したと感じている。

○行動目標の作成について

行動目標の作成においては、全国学力・学習状況調査の生徒質問から、飫肥中学校の目指す生徒像を決め、職員間で何度も議論し行動目標を作成した。あわせて、生徒会でも行動目標を考えて職員と一緒に最終決定することで、より生徒に主体性を持たせ進めることにつながった。実際に、職員案だけではなく行動目標を生徒案からも採用することができた。生徒に伝わりやすい言葉のチョイスなど気付いたことが多くあり、生徒会との連携はスクールワイドPBSを進めるには必要不可欠な要素でもあると感じた。

また、応用行動分析のA「先行事象」では、「なぜこれが大切なのか」このことを職員間で共通理解をして、しっかりと生徒に伝えることが重要であること、このこともSWPBSの肝であると感じる。



○プレ実施について

プレ実施では、本校が以前から取り組んでいるノーチャイム週間にあわせて、「1分前着席」について実践した。その実施に向けて、ICT支援員の協力を得て一人一人を認め褒めるフィードバックの方法に取り組んだ。生徒たちの反応も良く、望ましい行動が強化される経験を繰り返してきたと感じた。実際に取り組むことで、様々なことが分かり、実践して良かったと感じた。

(課題)

○行動目標の作成について

行動目標が決まり、実際にそのことを実践しようとすると、思いもよらないほど多くのことを考える必要があった。SWPBSでは、一人一人に承認を返せることが良いのだが、全体を認める場面と、個別で認める場面と結果のフィードバックの方法でまだ方向性が定まっていない部分がある。本校で立てた行動目標をよく見ると多くがそれに当てはまる。

しかし、時間はかかるが職員間の意識の統一が大切であるため、行動目標のA（できる環境をづくり）とC（フィードバック）についてしっかりと議論する時間を作る必要がある。

○来年度について

日南市における令和7年・8年の校内研究は、「教員の授業改善」と「学力向上」に主眼におき、各学校を中心となる視点を定めて取り組むこととなっている。そこで本校ではSWPBSを取り入れた授業を中心となる視点として定め、SWPBSの試行に加えて行動のABC分析を活かした授業改善に取り組んだ相互参観授業の計画をしている。

また学校の現状や関わる人の思いや願いを大いに反映させて、自分たちの学校づくりを実践していく取組だと改めて実感できるようにすることが大切である。そのためには、「こんな学校にしたい」「こんな生徒に育ってほしい」という思いを確認しながら行動目標を年度ごとに更新していくべきであると思う。その手立てとして、生徒総会や話し合い専門委員会との連携は必須である。

2年目の来年度はキャンペーン方式で、いくつか実践を積み重ねていきたい。行動目標への実践の中、その都度、解決に向け丁寧に合意形成を図りながら進めなければならないと思う。

○データシステムの構築について

また、「成果データ」および「実行度データ」を定期的に収集できる仕組みの構築が必要である。得意な先生方やICT支援員の力を借りながら集計、分析を進めることや、データの見方、考え方の共通理解を深めることもこれから必要になっていくと思う。

【参考文献】

- ・「学校全体で取り組むポジティブ行動支援スタートガイド」ジーアース教育新社
- ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた「分かる!」「できる!」学校全体で取り組む授業の土台づくりハンドブック 宮崎県教育委員会
- ・「先生が気づいて動けるチェックリスト」富山県教育委員会
- ・「ポジティブ行動支援」徳島県立総合教育センター 特別支援・相談課
- ・「アメリカの生徒指導体制「スクールワイドPBS（ポジティブ行動支援）」～オレゴン大学から発信される、全校児童生徒を対象としたユニバーサルな学校デザイン～」三田地真実・岡村章司・原口英之・神山努
- ・「特別支援学びのひろば」徳島県立総合教育センターHP